



Title	学校図書館の現状：私立K中学高等学校における図書館の変遷から
Author(s)	大平，睦美
Citation	大阪大学教育学年報. 2009, 14, p. 27-35
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/12350
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

学校図書館の現状

—私立K中学高等学校における図書館の変遷から—

大 平 睦 美

【要旨】

本稿では、大阪府の中高一貫校である私立K学院中学高等学校における学校図書館の変遷を述べた。そして、それら学校図書館の変遷を述べる中で、学校図書館のあり方について検討を行った。その結果コンピュータ導入によって、本を検索しやすくなるなど、利点があった一方、生徒たちの理想とする図書館像との相違があることがわかった。また、学校図書館のあり方としては、利用者と資料・情報を媒介し、人との出会いの場としての媒介ともなるメディア・センターを目指すことが課題であると考えられた。

1. はじめに

児童生徒の活字離れ、読書離れが社会的な関心事項としてマスメディアに取り上げられるようになった。また、2003、2006年のOECDによる学力調査（PISA）の結果（OECD2004, 2007）や2007、2008年の文部科学省の学力調査の結果（文部科学省・国立教育政策研究所2007, 2008）から、児童生徒の国語や算数、数学における応用力、とりわけ読解力に課題があることが明らかになった。従来、読解力は国語科の指導と考えられてきたが、国語という教科の中だけで学習するのではなく、すべての教科に必要な総合的な学力であると認識されるようになった。

2008年に公示された新学習指導要領においても、各教科を通じて学校図書館を活用し、児童生徒の学習活動を充実させることが組み込まれている。一方、ユネスコによる「学校図書館メディア奉仕宣言(1980)」や「学校図書館宣言（1999）」に明示されているように、国際的な学校図書館への期待もある。（コーンハウザほか2000）そこで、本稿ではK学院中学高等学校図書館の1990年代から現在に至る情報化の過程と、現在の利用状況について報告し、今後の学校図書館の課題と展望について述べたい。

2. K学院中学高等学校図書館の概要

2-1. 施設

K学院中学高等学校は、中高一貫の私立女子高である。学力は中位にあたり、多くの生徒は大学への進学をめざしている。また、カトリックのミッションスクールとして幼稚園から高等学校まで、伝統的教育を守っている。比較的恵まれた家庭環境の生徒が多く、近年マスメディアが取り上げるような、教育現場の崩壊も存在しない。

図書館は新館と呼ばれる3F建て特別教室棟の最上階に位置する。蔵書冊数は約3万冊、そのうち3000冊が新書・文庫本、また学習マンガを約100冊揃えている。司書室を除く閲覧スペースは約4教室分、閲覧用に36席、キャレデスクといわれる、一人掛けの机が16席ある。（図1、図2、図3）

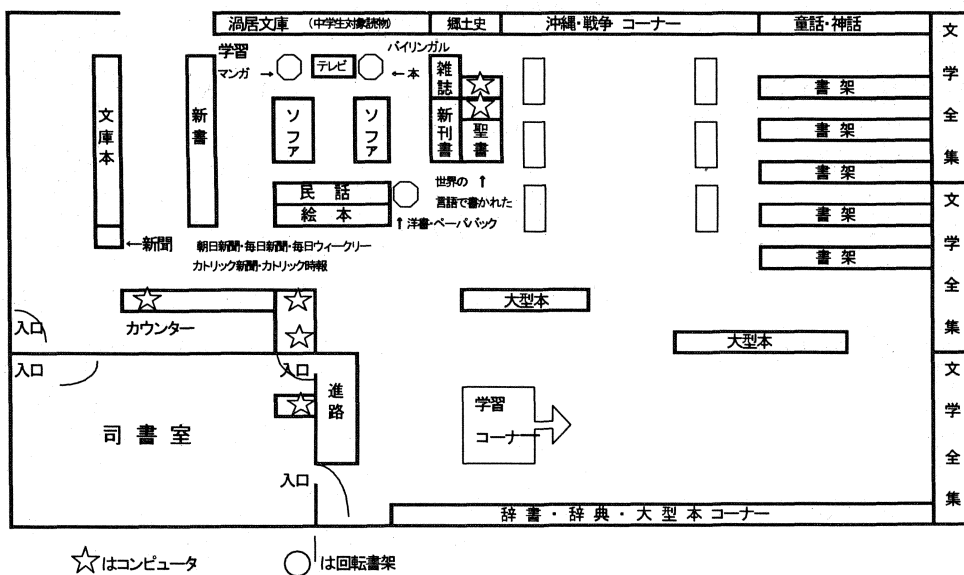


図1：レイアウト



図2：キャレルデスク

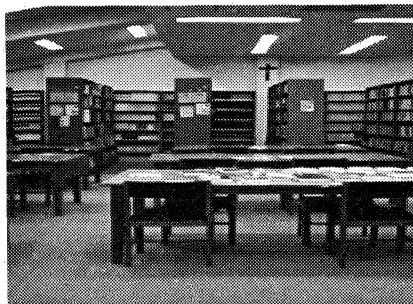


図3：閲覧席

雑誌架の横には、ソファ2客とビデオ・DVD観賞用のテレビ1台設置して、リラックスコーナーと名付けている。また館内BGM用のオーディオシステムがあり、昼休みにはクラシック音楽を流すなど、活用している。(図4、図5)



図4：リラックスコーナー1 ソファ

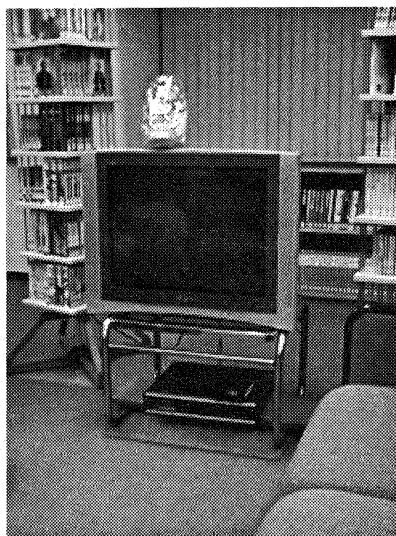


図5：リラックスコーナー2 テレビ

蔵書構成の特徴としては、カトリックの学校であるため、キリスト教に関する本が充実していることと、同校が英語教育に力を入れていることから、洋書が中学高等学校としては充実していることがあげられる。

2-2. 学校図書館の活動

本の貸出返却、検索にはコンピュータを活用している。図書館内のカウンターには、貸出返却専用のコンピュータが1台、生徒検索性のコンピュータが4台設置されている。これらコンピュータはインターネットでの情報検索が可能であり、生徒は図書館内の本の検索だけでなく、インターネットを使った調べ学習にも活用している。図書館の運営は、校務分掌の「図書部」と各クラス2名からなる「生徒図書委員会」で行われている。2008年度の「図書部」は専任の司書教諭1名、英語科教諭2名、国語科教諭2名で構成されている。開館時間は平日、昼休みと放課後16時30分まで、土曜日は14時30分までである。貸出は夏休み・冬休みの長期休暇と読書週間を除いては、1人2冊、貸出期間は1週間（ただし予約がない場合は、最高3回まで延長可能）。長期貸出期間と読書週間には1人5冊まで貸出可能である。

図書館の活動としては、全新生対象の図書オリエンテーション行っていることと、年に3回（各学期毎）高校生が図書新聞「かわらばん」の発行、中学生が「図書 壁新聞」を発行している。9月の文化祭には展示の部に「図書委員会」として参加している。読書週間には毎年「『広辞苑』も貸します」と銘打って、学校図書館の本を全て貸出すという企画を行っている。図書館内では季節ごとにテーマをもって、館内の資料を使った展示を行っており、同様に新館の1Fにある図書館展示用スペースには毎月さまざまな趣向を凝らした展示をし、生徒のみならず教職員に対しても、読書の啓発を心がけている。（図6）

また、保護者に対しても月に1度読書会を開催し読書の啓発とともに、学校図書館の活動を紹介し、保護者が家庭における読書習慣の重要性を確認する機会を持っている。

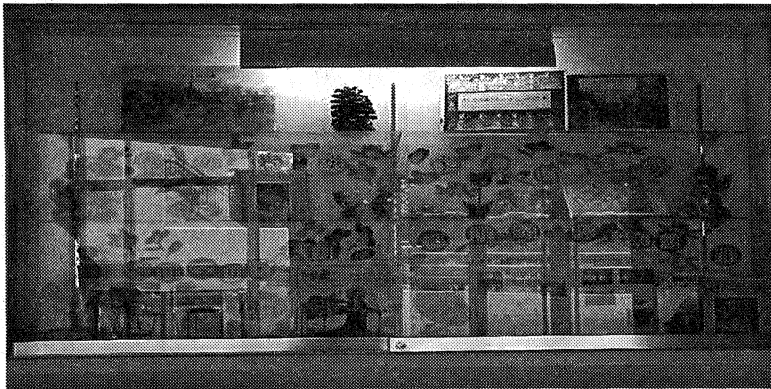


図 6：新館 1 F 掲示用棚

3. K学院中学高等学校の図書館情報化

3-1. 情報化の目的

コンピュータを導入したのは、1994年1月である。約1年の準備期間を経て、1995年4月から貸出・返却、検索にコンピュータが利用できるようになった。コンピュータを導入した目的は、学校の中にある図書館として、限られた開館時間（昼休みと放課後）に、おもな利用者である生徒に対して、より速く、より正確に、より多くの情報を提供することである。その1年後には、約17000冊の蔵書があり、年間約1000冊近い図書を購入する予定となっていた。そして、当時は目録カードだけをもとにして本の検索を行っていた。よって、本の検索には、検索を担当する者に力量が必要であった。また目録カードのみで本を探さねばならないことで、図書の選択、購入、整理といった作業を行う余裕はほとんどない状態であった。

また、図書館を利用する生徒や教職員から「図書館には本がない」という意見を聞いた。なぜ本がないといわれるのだろうか。理由は以下の2点が考えられた。

- ・古典名作文学を中心とした文学重視の蔵書構成
- ・必要な時に、必要な本が見つからないこと

このような蔵書構成の問題をうけ、文系教科に偏りがちな図書部スタッフだけで選書するのではなく、すべての教科の担当者に依頼し、購入図書の選書をした。授業と日常業務に忙殺される教師に依頼するだけでは、購入希望図書の提出は困難であるため、各教師と個人的に授業の内容や進み具合についてたずね、こちらから書籍に対する資料、情報を提供し、共に検討し蔵書構成を見直した。また、教職員が利用しない図書館を生徒に薦めることはできない。教職員が利用し、生徒に学校図書館に行けば、知りたい何かを知ることができるということを伝えられる図書館を目指し、司書教諭が積極的に他の教職員とコミュニケーションを図り、資料や情報を提供した。その結果、教職員の利用が増加し、今では他校と比較しても、教職員の利用が活発な学校図書館となった。

次に、必要な時に必要な本が見つからないという問題点については、司書教諭が蔵書やそれ以外の書誌内容の知識を深め、図書館に関する様々な資料を取り寄せた。そして、当時、公共図書館や大学図書館、大学付属の一部の先進的な中学高等学校の図書館でコンピュータの導入が検討され始めていた。しかし大部分の学校図書館では、図書館のマンガ購入と、図書の盗難が課題となっており、コンピュータよりも盗難防止の機械の導入が話題となっていた。

3-2. コンピュータの導入

先述した、必要な時に必要な本が見つからないという問題点を解決するため、コンピュータ導入が不可欠であると考え、1994年1月に予算250万円でサーバ機とデータ入力用コンピュータ（NEC）の2台を購入した。翌年4月までに約2万冊の書誌データについて、蔵書すべてにバーコードを貼り、書誌情報を入力した。コンピュータソフトは市販品（渋谷コンピュータ（当時）「名館長 大博士」）を購入した。また、翌年4月、学校図書館運営にコンピュータを導入するため、貸出・返却用、生徒検索用コンピュータの2台を新たに購入した。（図7）

導入後、約4年後に書誌データが23000冊を超えたところから、コンピュータのトラブルが多発し、検索時間が長くなるようになり、生徒一人が1冊の本を探すだけで昼休みが終わることが続くようになった。1990年代後半、インターネットが普及しコンピュータのマウス操作が一般的となり、生徒からもコンピュータの操作方法がわかり辛いとの意見があったことから、コンピュータの買い替えを検討した。また、コンピュータの買い替えと同時にシステムも変更することとした。先のソフトは主に公共図書館向けのソフトであったため使いにくい点があったことと、コンピュータの性能が格段に進んだために、データの互換性がなくなったためである。約5年間に学校図書館にコンピュータを導入する学校も増加し、学校図書館向けソフトが多数開発されており、新たなシステムへの変更で、購入価格と保守契約料を安価に抑えることができた。

2001年4月、新たなソフトと書誌情報入力用コンピュータを購入し、2002年4月より新システムの利用ができるように、再び書誌情報の入力を開始した。バーコードは前回のものを利用できるため、1人でも作業可能となった。前回の入力の際、いくら綿密に打ち合わせていても入力に相違が生じ、検索結果に差異がみられたが、新たに完成したデータは前回よりも統一されたものになった。（購入ソフト CASAⅢ 総合出版販売株式会社）

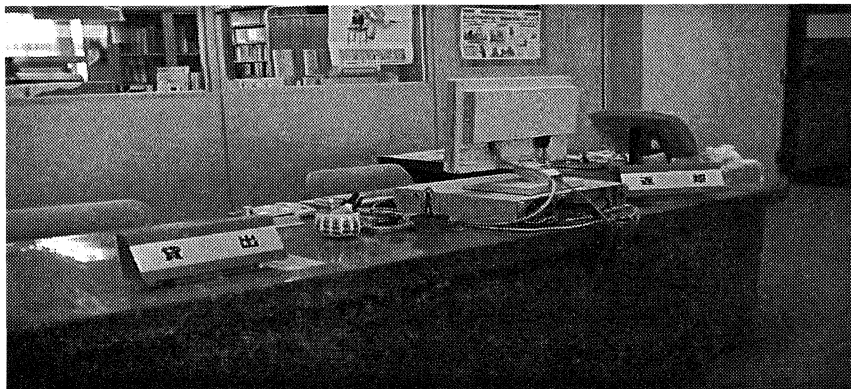


図7：貸出・返却用コンピュータ

4. 学校図書館の課題 ～生徒の理想の図書館像から～

コンピュータの利用が軌道に乗り、図書館の利用者が増加し、円滑な図書館運営が続いた。一方、書架を眺めて、本を見ている利用者がほとんどいないという状況が見られるようになった。たとえば、図書館を訪れる利用者の多くは、コンピュータで目的の本、あるいはコンピュータで示された分類の書架に直行する。コンピュータ検索で“ヒット”しなければ、書架を探すこともなく、その本はないものとしてあきらめる。このように、図書館に来て、目次を見て本を探す利用者がほとんどいなくなった。このような状

況はインターネットが急速に発達し、図書館で本を使って調べることに代わり、インターネット検索が一般化されたところから見られるようになった。

あるとき、図書館にいた生徒たちに「理想の図書館」について尋ねてみると、『耳をすませば』（1995年 近藤喜文監督 スタジオジブリ制作 東宝配給）に描かれている学校図書館が理想の図書館であると言う。一人がそういうと、何人もの生徒が同意した。そして、この生徒たちが理想と述べている図書館は、古色蒼然とした「古い学校の図書室」なのである。この映画では、本の貸出しは、図書カードと本に貼られた読書カードの両方に名前を書いて貸出する方法である。このような貸出方法はプライバシーの保護により現在は行われていないと日本図書館協会がクレームをつけ、DVD化の際にはその旨の字幕が入ったとのことであった。コンピュータが導入された現在の図書館ではなく、導入前の図書館の方が、映画の中の図書館に近いといえる。このように、生徒たちが理想とする図書館と、コンピュータを導入した図書館との間には隔たりがあった。

この隔たりをなくすため、映画を見た感想を生徒たちと述べあった。そして、生徒に利用者としての率直な意見を聞いた。生徒の意見をまとめると、コンピュータは便利であり、貸出返却等コンピュータを利用することに対しては好意的ということであった。『耳をすませば』の図書館が理想であるというのは、利用方法を言うのではなく、図書館に人がいることがいいのであるということであった。（大平 2008）図書館を通じて誰かとコミュニケーションできることにに対して喜びや、憧れをもっていた。今の生徒たちは、遊ぶなくなった、本を読まなくなったといわれるが、それは子どもたちだけの理由ではなく、遊ぶなくなった、本を読めなくなった環境もある。例えばこの学校では、テスト期間中、図書の貸出しはしない。テスト期間中、図書館は自習室として利用できるように開館しているが、保護者から「テスト期間中に本を貸出すと生徒が本を読んで勉強しないからやめて欲しい」と、学校にクレームが届くためである。「本を読みなさい」と言われる一方、「テスト期間中であるから本を読んでいる暇があるなら、勉強をしなさい」と言われる。大人も子どもたちも矛盾に気づきながら、目の前のことに気をとられ、その中にとどまっている。生徒が何の意見ももたずにただそこにいるのではない。分かっているがどうすることもできないことが多いのである。

さらに、少子化にともない兄弟姉妹が少ない、またいない生徒も少なくない。親以外の人とのコミュニケーションに慣れていない子どもが増加している。では、コミュニケーションが必要でないのかというと、むしろその逆で、だからこそ「誰かとつながりたい」、「独りになりたくない」という気持ちを強く持っている。でも、どうすればいいのかわからない。誰にも聞くことができない。また子どもたちだけではなく、彼女らを導くべき大人である私たち教師にも同じ悩みが存在する。

5. メディア・センターとしての学校図書館～あらたなメディア・センターとして～

情報提供の場として、学校の中核となるような学校図書館の運営が目指されてきたが、生徒たちの『耳をすませば』の図書館が理想の図書館であるという意見を受け、メディアがもつ「媒体・手段」という言葉の意味を活かした学校図書館を考える。ここでは人間活動における媒介の存在を強調する。Vygotskyによる行為の三角形モデル（図8）を基礎としてモデル化を試みたい。Vygotskyは行動主義の刺激－反応理論は、動物の場合には良いかもしれないが、人間においては、そこに媒介が存在することを三角形を用いて主張している。（Vygotsky 1978）さらに学習のような活動では、図9に示されるように、認知主体（S:subject）と客体（O:object）の相互作用の軸の上に三角形が形成され、その頂点に媒介（M:mediation）が存在しており、具体的には言語、コンピュータ（インターネット）、事典、ノート、ペンなどの人工物や人間による媒介があげられることが示されている。（菅井 2005）

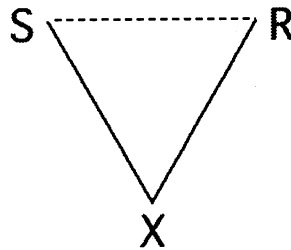


図 8：媒介された行為 (Vygotsky 1978)

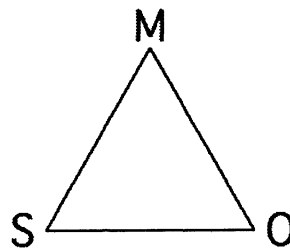


図 9：認知の三角形 (菅井 2005)

すなわち学校図書館は、利用者に情報を提供するだけでなく、図10のように利用者と対象を媒介する、また人との出会いの場としてのメディアになるべきと考える。つまり、多くの生徒や教職員の出会いの場としての学校図書館である。

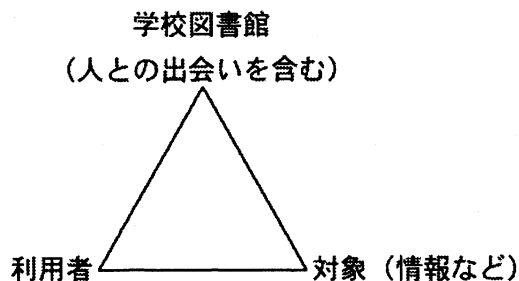


図10：媒介としての学校図書館モデル

6. 学校図書館における今後の課題

勉強や課外活動で忙しい生徒や教職員の利用は困難である。そこで司書教諭が学校行事には積極的に参加し、図書館独自の企画を行い学校全体に図書館の存在をアピールするとともに、各教科のカリキュラムに図書館の利用が組み込まれるように、各教科担当者とコミュニケーションを図らなければならない。

その他、修学旅行の事前学習や、学習発表会、感想文や朗読大会など、学校行事を把握し、それらに適切な資料・情報を提供できるように準備することも重要である。加えて、生徒が調べたもの、発表したものを保存、保管し資料を蓄積することで、さらなる資料として次年度に活かすことができる。また、情報があふれる社会に生活している私たちは、自分で考えるよりも先に、たくさんの情報を知らず知らずのう

ちに受け取り、意識しないうちに受け取った情報が、自分の考えだと思い込むことがある。生徒の場合はなおさら意識しなければ、他者の意見と自分の意見の違いに気づかないままにすることが多い。「自分の言葉で考え、自分の言葉で伝える」ためには、何か一つのことを調べるにつけても、多方向から物事を見て、伝える言葉以上の考える言葉を持たなければならない。そのことを生徒に伝えるために、学校行事や各教科から小論文対策や課題等で、資料・情報について依頼を受けた際には、図書館を出て、教室に行き情報リテラシーの育成に努めることも必要となろう。このように司書教諭も情報リテラシーを身に付け、さらには利用者である生徒や教師に対しても、情報リテラシーを育成することが重要な役割となる。(大平 1999)

また、学校図書館法の第二条で図書館を「学校の教育課程に寄与する学校設備」と定めるように保健室やカウンセリングルームとも連携し、子どもたちの学習環境を整えるだけではなく、子どもたちの学校生活を支えることができるように考慮する必要もあると考える。それが「学校の教育課程の展開に寄与する学校設備」(「学校図書館法」第二条)であろう。はたして「理想の学校図書館」とは何か、それを達成するには、さまざまな取り組みを実施するなど、努力が必要と考えられる。

たとえば『スター・ウォーズ エピソード2』では、ジュダいの図書館らしき場所が表現されている。情報は電子化されており、未来の図書館を思わせる。しかし、「場」として存在することに注目したい。資料・情報の提供方法はコンピュータや情報通信の発達により変化し続けるであろう。しかし、「場」としての学校図書館は、学校図書館法によってではなく、あらゆる情報とコミュニケーションできる「場」として存在することとなるであろう。

今後の課題としては、年毎に授業だけではなく放課後も補講、補習が日常となり、忙しさを増す生徒たちの図書館利用を望めなくなりつつあることから、学校図書館が正式なカリキュラムとして、教科学習の中に組み込まれるように資料収集と図書館活動の充実につとめなければならない。そして、さらなる学校教育の展開に寄与できる学校図書館を具現化できるよう理論と実践の両面から構築することが課題である。

〈参考文献〉

- OECD 2004 Learning for Tomorrow's World First Results from PISA 2003
 OECD 2007 PISA 2006: Science Competencies for Tomorrow's World Executive Summary
 文部科学省・国立教育政策研究所 2007『平成19年度全国学力・学習状況調査 調査結果の概要』
 文部科学省・国立教育政策研究所 2008『平成20年度全国学力・学習状況調査 調査結果の概要』
 コーンハウザ由香子、岩崎れい、庭井史絵、大平睦美、枝元益祐2000「学校図書館の役割と教育への貢献：教育施設と学校図書館の接点」『同志社図書館情報学』, 13-60頁
 大平睦美 2008「カウンターだより」『千里眼』第103号, 14-20頁, 財団法人千里文化財団
 L.S.VYGOTSKY 1978 Mind in Society Harvard University Press.
 菅井勝雄 2005『平成14-16年度科学研究費補助金 基礎研究 (A) (2) 情報ネットワークを利用した総合学習のための広域映像配信システムの共同開発と評価 研究成果中間報告』, 1-8頁
 大平睦美 1999「メディア・センターとしての学校図書館に関する研究」『日本教育工学会第15回全国大会論文集』, 365-366頁

The Present State of the School Library : The Case of K Gakuin School

OHIRA Mutsumi

This paper provides information about the present condition of the school library by adoption and analyzing the case of K Gakuin School. First, the history of the library of K Gakuin School is presented. A notable point is the introduction of computer media which facilitated the process of location books for both students and teachers. However, there was found to be a gap between the present state of the library and students' expectations of the ideal. This research clarified that the future direction of the school library is its transformation into a media center.